



富士通株式会社
非営利教育法人JAIMS (日米経営科学研究所)

東洋と西洋の「知」を総合したマネジメント教育で、
次世代のビジネス・リーダーを育てる

一九七二年、富士通株式会社の提唱により、ハワイに設立された非営利教育法人JAIMS (日米経営科学研究所) は大学院レベルの異文化マネジメント教育を提供し、これまでに約二万三千人もの修了生を輩出した実績を持つ。二〇〇七年からは所長・野中郁次郎一橋大学名誉教授の提唱で「東洋と西洋の経営知をハイブリッドしたマネジメント理論」を発信する教育機関を目指し、アジア地域を中心に次世代を担うリーダー育成に力を注いでいる。

多様性、国際性を問われる今日、JAIMSの意義と将来への可能性、新時代のリーダーシップのあり方について、富士通株式会社JAIMS支援部長・井口久美子さんにかがった。

◆ ◆ ◆
これまでのJAIMSのあゆみ

JAIMS (日米経営科学研究所) という名前の通り、創設時の七〇年代は日米の架け橋となる人材育成を目指していた。海外に行くことさえ

珍しい時代に、一民間企業がハワイに日本と米国それぞれの経営、異文化を学ぶ学校を設立したこと自体が画期的なことであったが、プログラムの内容もユニークなものだったという。米国の経営を学ぶプログラムの中に、富士通の大型コンピュータを使って経営をシミュレーションする授業を取り入れたのはその一例。

日本型経営が世界から注目された八〇年代後半になると、日本の経営を教えるプログラムには世界各国から受講生が集まった。九〇年代からはアジア・パシフィック地域が経済的に発展。アジア各国の経済交流が盛んになる中、JAIMSの使命もグローバルなものに発展。アジアパシフィック地域の発展に貢献することを目的に、異文化環境でのマネジメントを理解するプログラムが提供された。

二〇〇七年には富士通社外取締役でもある野中郁次郎氏がJAIMS第七代所長に就任。アジアから世界を変えるリーダーを育成すべく活動を推進している。そのコアとなる教育プログラムが、野中所長のビジョンに基づき開発されたEWWKLP

(East-West Knowledge Leaders Program)。東洋と西洋の経営における実践的な知(ナレッジ・知識資産)をスバイラルアップさせ、個人人の持つ知を組織で共有し、高次の知に膨らませ、イノベーションを生み出していくリーダーを養成する三カ月のプログラムである。一九八五年にスタートした富士通奨学金(アジア太平洋の十八の国と地域の人に支給する)を利用して学生も参加しており、現在、参加者の約半数がアジアから、半数が日本から集まるという状況になっている。

三ヶ月の濃密な時間を共に
過ごすことで真の異文化理解
を育む

「東洋と西洋の融合するハワイで各国からの参加者とともに異文化に身を投じるということが大きな経験になると思います。やはり自分の立ち位置に気がつかないと、今後、自分がどこへ向けて進んでいくのかわからない。その原点を見つめる場になるといいうベースの部分はずっと変わっていないのだと思います。世



世界各国から集まるJAAMSの受講生

界中から集まった参加者、講師との対話を通じ、人間性・知性・感性を刺激し、自分を、相手を、世界を理解する中で、より良い未来を創り出すリーダーとしてのあり方を考えて

ほしい」と井口さんは言う。

現在、EWKLP受講者の平均年齢は三十代前半。講義はすべて英語で行われる。またプログラムではビジネスケースを読んでディスカッションなどを行うので、背景のまったく異なる各国の人たちに自分の意見を言うという経験を否が応でも積み重ねることになる。

「やはり日本人はどこか奥ゆかし、他国の受講生からすると『日本人は自分の意見をちゃんと知らない、日本人とどう付き合ったらいいかわからない』ということになりま。しかし意見を言わなければ『この人とはやりたくない』という自己主張をする外国人もいます。お互いにとつて、まさに異文化体験。グループワークが主体なので、参加者は朝から晩まで一緒に過ごします。最後はお互いの文化の違いを受容し、そして理解しあうという関係になるんです」

プログラム修了後、参加者が一緒にパールハーバーを見学に行った際、その歴史的な場で全員が一瞬、何も言えず黙り込んでしまったことがあると井口さんは言う。

「歴史的なことも踏まえ、お互いを理解したからこそ思いやりも出て、なにも言えなくなっただけですね。その後、みんなの中で『過去には国としていろいろあったけれど、今はここで一つになった。私たちは仲良くやっていこう』という声が出た。こういう経験がアジアのコミュニケーションを作る土台になっていくのだと思います」

存在意義を問いながら リーダーシップを考える

「次世代リーダーは数字を目標にするといった近視眼的な考えを持つのではなく、わが社の存在意義は何なのか、人のため、社会にどう貢献するのかという本質を、頭の中だけでなく実践を通して深く追求することが重要だ」というのが野中所長の発想である。このためEWKLPでは常に実践を重んじ、現場体験から問題の本質を徹底的に考え抜くことを重視する。受講生たちは皆、この部分に大きな影響を受ける。

八年間勤めた貿易会社を辞め、EWKLPを受講した日本人女性は、

帰国後、フェアトレードの会社に転職。「自己満足的な自己実現ではなく、社会を、人を幸せにするには自分は何ができるのか」という人間としての気づきを経て、次のステップに進むことができたという。

「マネジメントのスキルだけでなく、自分が今後、人間として自分の人生の中でどうあるべきかを考える場としてもJAAMSは有効だと思います。時代が大きく変わろうとする今だからこそ、タイミングを逃さず、新しいことに挑戦してほしいですね」と井口さんは言う。



「百年に一度」ともいわれる経済危機に多くの企業が直面している時期だからこそ、経営者や企業人には、本質を考え抜く力が求められる。そして本質の追求のためには、「暗黙知」と「形式知」をスパイラルアップさせることが不可欠だ。

東洋と西洋の知を総合したリーダーシップ教育について地道な作業を積み上げてきたJAAMSの成果が、各国で花開くことを期待したい。